

日大工学部電気電子工学科の計測制御システム研究室の高梨宏之准教授(四三)は、自動車の運転上の危険を予測し、事前に運転者に知らせるシステムの開発に取り組んでいる。歩行者が死角から飛び出す可能性が高いシチュエーションなどを過去のデータを基に判断し、運転者の注意を喚起、悲惨な交通事故の防止につなげる。

ロハスの風 VOL.5

～日大工学部の挑戦～

出しを警告する装置などが一般的だ。現在の技術では、車載カメラが壁や車線を認識して危険な場面に遭遇した場合にシステムが作動する。高梨准教授は、危険な場面に遭遇しないようにするシステムを目指している。

計測制御システム研究室 (電気電子工学科)



ものづくりを通して大切な人たちの安全を守りたいと研究に励んだ村尾さん

ら飛び出してきた自転車を運転者が認識し、ブレーキを掛けるまでの時間などを調べた。その中で、自動車の取り付ける赤外線レーザーセンサー装置の位置を、現在の一般的なフロントガラスの中央から、右端に移動させることで、自転車が死角から現れるのをより早く認知できると証明できたという。

交通事故や犯罪、自然災害…。身の回りの生活にはたくさん予期しない危険が潜んでいると村尾さんは実感している。ものづくりを通して大切な人たちの安全を守りたい。その思いが研究に打ち込む原動力だ

四月には県外の電気設備会社に就職。現在は現場の安全を確保する施工管理を担う。

運転者の経験に頼っている危険予測に、データに基づくシステムを使えば、予兆を見逃さずに察知できると高梨准教授はみている。システムを発展させ、危険予測の精度を高めるのが至上命令だ。今後は、歩行者や対向車などの動きもデータに基づき予測できるように研究を進めている。「必ず安全を今より前に進める」。事故のない社会の実現に向け、高い目標を自らに課している。

次回は5月8日

ロハス(LOHAS: Lifestyles Of Health and Sustainability)

心と体、地球にやさしい生き方

危険予測技術で事故防止

・建物といった障害物、交通量など、外的な要因を解析。データ化してシステムに組み込んでいく。走行中に事故が起こりやすい外的な要因がどの程度あるかを常に判別し、運転者に知らせる仕組みだ。

三月まで同研究室に所属していた村尾勇武さん(三三)は、電気電子工学科卒業後、見通しの悪い道路で死角か